KOTOBAOLOGY

発行：株式会社博報堂 研究開発局
企画編集：研究開発局 手塚グループ
デザイン：KARAPPO Inc.
発行日：平成28年12月1日
http://kotobaology.jp/

KOTOBAOLOGY

社会は「ことば」で、できている。「ことば」が社会を動かしている。　＜ことばオロジー＞

volume 4

2016 December

THEME：「天と地と日本人と。」

天地

夕陽が泣いている　太陽に愛されよう　真っ赤な太陽　太陽の塔　太陽にほえろ！
空に太陽がある限り　サンシャイン６０　太陽を盗んだ男　太陽光発電　太陽ノック
見上げてごらん夜の星を　星のフラメンコ　星影のワルツ　巨人の星　セブンスター
月面着陸　天才バカボン　スター誕生！　月面宙返り　チップスター　銀河鉄道９９９
宇宙海賊キャプテンハーロック　スター・ウォーズ　天中殺　フルムーン　聖闘士星矢
美少女戦士セーラームーン　ミカン星人　スターにしきの　夜空ノムコウ　ほしのこえ
星空のディスタンス　天空の城ラピュタ　空と君のあいだに　きらきらネーム　青天の霹靂
雲のむこう、約束の場所　東京スカイツリー　何度目の青空か？　青空の下、キミのとなり
にじいろ　グランドキリン十六夜の月／ギャラクシーホップ　荒野の七人　荒野の用心棒
砂の器　この惑星のテレビは、タモリがいないとさびしい。　地球は青かった　天国と地獄
網走番外地　天と地と　人の命は地球より重い　愛は地球を救う　地球環境　アースデイ
地球にやさしい　奇跡の地球　愛・地球博　きのこの山　東京砂漠　八甲田山　地方の時代
山河燃ゆ　地上げ屋　土地転がし　土地神話　山が動いた　野人岡野　大地の子 猿岩石
ジベタリアン　地上の星　ジモティー　ヒルズ族 森ガール 山ガール 東日本大震災
天地人　地デジ化完全移行　ジバニャン　ご当地キャラ　地域創生　聖地巡礼

©2016 Research & Development Division, HAKUHODO inc. All rights reserved.
掲載内容の無断複製・転載を禁止します

天と地と日本人と。

「きらきらネーム」ということばをご存知でしょうか。星の輝きのような煌びやかさや華やかさを感じさせる、これまで見られなかったような個性的な人名のことで、この10年で市民権を得たことばです。

今活躍する若いアスリートの名まえを見ると、ずいぶん「きらきらネーム」が目立つようになった気がします。世界の大舞台で物おじしない活躍ぶりに、その名は、まさしく天駆けるスターとしてふさわしいと言えるのかもしれません。

身近なところに目を転じると、気軽に山登りを楽しんだりアウトドアを楽しんだりする「森ガール」「山ガール」と呼ばれる若い女性が現れています。「森」や「山」といった土のにおいに「ガール」ということばは、とてもユニークな組み合わせではないでしょうか。

今回、この「きらきらネーム」「山ガール」をはじめ、この半世紀の日本の社会に登場した天と地にまつわることばを集めて、その変遷を眺めなおしてみました。

このテーマから、うたかたに見えることばの移り変わりの中にも、私たち日本人ならではの一貫した何かが浮かび上がるのではないかと考えたからです。果たして私たち日本人は、これまで、いかなる天と地とともに生きてきたのでしょうか。

KOTOBAOLOGY を 始めよう。

社会は「ことば」で、できている。

「ことば」が社会を動かしている。

世の中で話題になったり、人の心を動かしたり、社会を活気づけたりしたいろんな事柄。すべてを、あえて同じ時代の「ことば」として同じ場で眺め直した時、そこから何が見えてくるだろう？

「ことばの考現学」そんな試みを「ことばオロジー」と呼んでみたい。「ことば」をあくまで「ことば」そのものとして、ジャンルやカテゴリーなど既成の縛りに囚われず時間の流れに沿って眺めてみることで、社会の動きを捉えられるのではないか。

その「ことば」が現れたのはどんな時代？
その「ことば」と他の「ことば」とのつながりは？
社会の変化と「ことば」の変化の間に関係はある？

そのように、「ことば」と「ことば」を出会わせ、つなぎ、時代と呼応させていくことで、私たちが日々暮らす、ことばでかたち作られた社会＝「ことば社会」の姿が、ストーリーとして見えてくるのではないか？

「ことば」にはもっと力と可能性があるはず。それをもっと見出していきたい。「ことば」から発想する楽しさを、もっと広げていきたい。

「月面着陸」から「きらきらネーム」へ

天上への引力

竹取物語では月に天上の世界があり、そこが本来暮らすべき理想郷として描かれます。
一方大地とは、卑俗で騒がしく不確かなもの。常に揺れる大地の上で暮らしてきた日本人にとり、**天と地**とが、まったくの別世界という認識だとしても不思議はありません。

月面着陸ということばに出会ったとき、日本人はあまり驚かなかったのではないでしょうか。
天上こそが、確かな陸であり、人間は、そこにようやく着いた、と。

引力に導かれるように、日本人はこの時から、心の上では天上での暮らしを始めます。

天上生活の開始・適応

天賦の**才**を発揮するキャラクター、**スター**を**誕生**させる番組、さらに安心な冒険という矛盾めいた楽しみ…次第に想像力と技術でその理想を実際に形にした生活を営み始めます。

至高の場を作る・至上の人をめざす

天空の城を築き、**雲のむこう**にさらに**約束の場所**を作るという発想は、理想だったはずの天上にそれを超えた理想を極めた、いわば至高の場ともいえる世界を作ろうとすることです。

実際に、いま私たちの社会はある意味そうした社会を実現しています。そこに求めたのは、大地の不確かさや猛々しさのない、平凡な日常という名の永遠の安定であり、行き着くのは、空よりも清浄でまっさらな何もない、**真空の世界**です。そうした世界で生きるには、人間も理想を極めなければなりませんね。**きらきらネーム**を名づけた親は、わが子という星に願いを託すのです。

人工のユートピアの何もない空に、今日も無垢な星たちが一生懸命に輝きます。

「地方の時代」から「地上の星」へ

地上への重力と二度目の天上への引力

都会とは、いわば人間が作り上げた理想の空間です。天上に暮らすということは、都会を作りそこで生きることだとも言えるでしょう。

日本人は大地がもつ決して失われない力を**神話**と呼びます。その重力にひきつけられ、私たちは幾度もく**大地**の**方**へアプローチを続けます。ただ、大地は絶えず揺らぎ山は突然動くものです。土地に翻弄された日本人はまた安住の天の世界へと還っていきます。

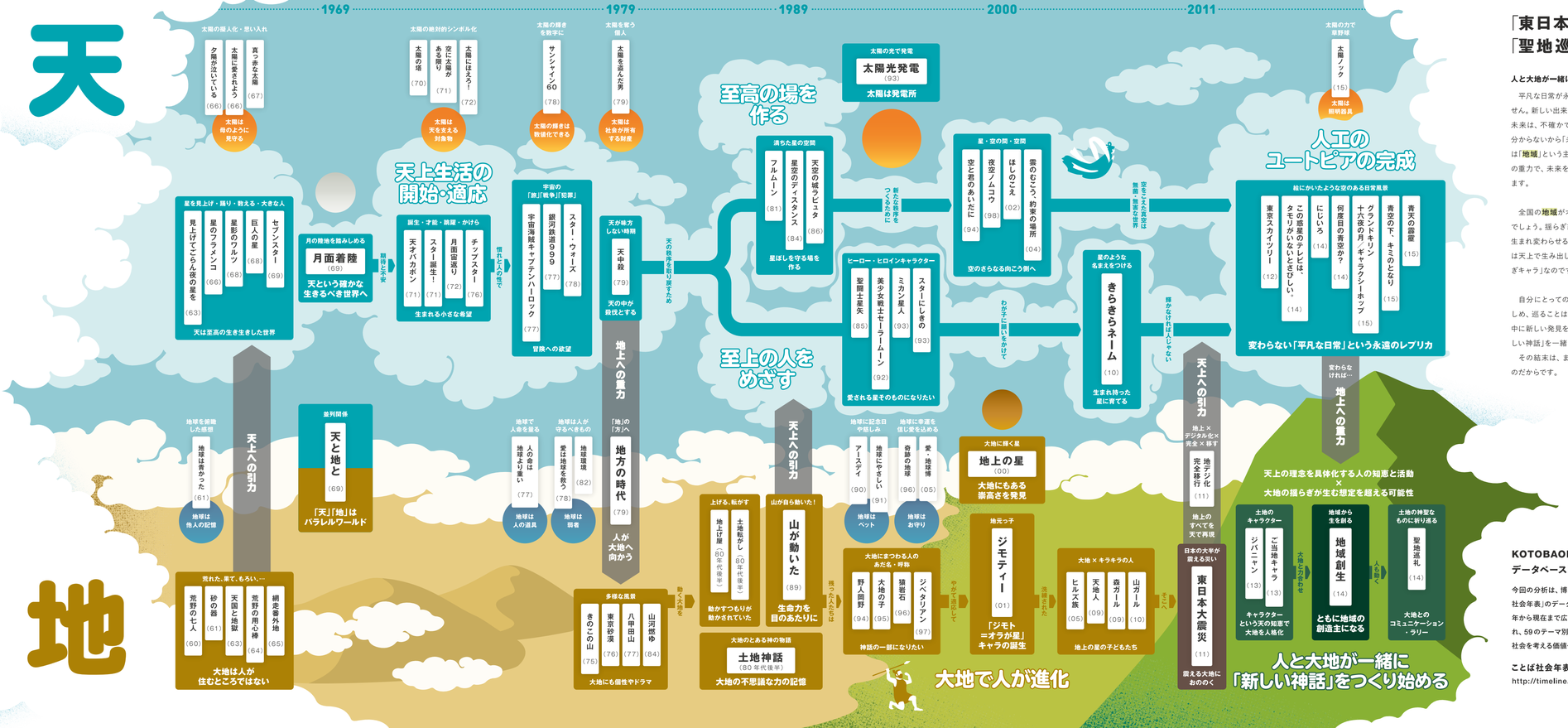
大地で人が進化

地方の時代かどうかは、その人の考え方次第です。天の世界に多くの人が還っていく一方、大地に残り、そこで生きることを選ぶ人もいました。そのためには、大地に新しい可能性を見出し、自分も変わらねばなりません。

やがて、**地上の星**を発見します。見上げれば、身近な土や地面の上からでも崇高さや理想の輝きは見つけ出せることに気が付いたのです。それは**大地の子**の、大きな進化の始まりでした。「ジモト」に新しいアイデンティティを育む人種や、**山**や**森**を手なずけて戯れる妖精が登場します。

ところが、日本の大地は、また大きく動きました。何もない「平凡な日常」が平凡ではなく、天の世界に住み続けてきた日本人の心がつくった理想であることに気づかされました。地上で培った日々も知恵も人々も、あの当時、みなそうした天上へと逃れたように見えました。

いま、また、その重力に導かれて、日本人は大地へ向かい始めているようなのです。



「東日本大震災」から「聖地巡礼」へ

人と大地が一緒に「新しい神話」をつくり始める

平凡な日常が永遠に続くものだとしたら、そこに未来はありません。新しい出来事は何も起こらず、何も変わらないのですから。未来は、不確かです。常に揺らぎ続け、未だやって来ることが分からないから「未来」なのです。そう考えると、かつての「**地方**」は「**地域**」という主体的で多様な存在になり、新しい意味と価値の重力で、未来を求める私たちをひきつけているように見えてきます。

全国の**地域**がオリジナルのキャラクターを求めるのは、なぜでしょう。揺らぎ続けてきたその土地の歴史を未来の可能性に生まれ変わらせる技術と知恵だと捉えられないでしょうか。それは天上で生み出し慈めてきたものです。「ゆるキャラ」とは「ゆらぎキャラ」なのです。

自分にとっての「**聖地**」を見つけ、その地に実際に赴き、踏みしめ、巡ることは、大地とのコミュニケーションであり、互いの中に新しい発見をする体験です。大地と人が、未来へ向けた「新しい神話」を一緒につくり始めているのかもしれません。

その結末は、まだ分かりません。未来は、私たちが、つくるものだからです。

KOTOBAOLOGYには、データベース「ことば社会年表」があります。

今回の分析は、博報堂研究開発局が運営するウェブサイト「ことば社会年表」のデータソースにもとづいています。この年表には1960年から現在まで広く社会で共有された「ことば」約2700語が収録され、59のテーマ別に時系列で閲覧することができます。「ことば」で社会を考える価値や楽しさを、ここから見つけて下さい。

ことば社会年表
http://timeline.kotobaology.jp/